

竹内街道をたどって

48期生

I テーマ設定の理由

祖父と母が作った「竹内街道の記録のアルバム」(1970年8月20日作製)を見て、家の近くを通っている竹内街道について調べ、また、母たちが行ったように実際にたどってみて、20年余りたった今、どのように変わったか、なぜ変わったか、当時の姿のままどれだけ残っているか、などを自分の眼で確かめてみたいと思った。

II 研究方法

- (1) 事前調査 「竹内街道とは?」・「竹内街道の歴史」について調べる。
- (2) 実地調査 母たちがとった昔の写真とほぼ同じ場所から写真撮影をして、現在の姿を比べる。
- (3) 事後調査 どう変わったか、昔の姿が残っているかなどを調べる。

III 研究内容

1. 竹内街道とは?

堺市おもしろい大小路から河内平野を東に向かい、二上山の南・竹内峠を越えて、奈良県当麻町の長尾神社(長尾街道と合流)に至る約30kmの街道をいう。しかし、始点を堺市の金岡神社付近(昔の丹比?)としたり、終点を橿原市または飛鳥京の北辺・横大路とする説がある。また、次のようにも書かれている。

- 堺市で紀州街道と分岐(大小路と考えてよい) → 堺市金岡 → 美原町丹比 → 羽曳野市壇生 → 羽曳野市古市 → 太子町山田 → 竹内峠 → 奈良県橿原市
- 堺市の東部 → 三国丘 → 八下 → 丹南 → 野林 → 檜山 → 五軒家 → 野々上 → 軽里 → 古市 → 駒ヶ谷 → 飛鳥(河内) → 春日 → 竹内峠 → 磐城 → 尺土 → 高田 → 八木 → 飛鳥(大和)

このように諸説があるのは、「日本書紀」の仁徳天皇14年(5世紀ごろか?)の条に「大道を作りて京中におく。南門より丹比邑に至る」と記された難波宮から南下して堺市の東部か美原町付近に通じた大道、また推古天皇21年(613年)11月の条の「難波より京(飛鳥京のこと)に至る大道を置く」と記録されているわが国最古の国道といえる大道のルートと、大部分が重なっていることが原因だと思われる。(図1)



▲図1

大道は大陸文化を飛鳥の京に伝え、飛鳥文化を開花させたが、奈良の平城京に都が移されると外交路としての意味を失い、かつては栄えた街道も次第に衰えてきたが、中世末に自治都市・堺が栄え、堺と大和を結ぶ経済の道として再び脚光をあび、竹内街道のもとができたといわれている。

竹内街道のルートや名が本格的に地図に登場するのは江戸時代であり、初期には堺から大和への道は「竹内街道ルート」と「富田林街道ルート」とがあり、前者は「穴虫海道」、後者を「竹内海道」と呼んでいた（「正保河内国絵図」17世紀中頃）後期になると「竹内街道ルート」が幹線となっていくが、各所図や道標には「大和路（街道）」・「大坂さかい道」と記されていて、「竹内街道」の名が定着するのは明治時代になってからと考えられている。

なお、大道の名は大阪市の四天王寺、天王寺区の町名、堺市金岡神社の「大道町」と刻んだ手水鉢、羽曳野市野の小学「大道端」、太子町山田の伊勢灯籠（18世紀後半）、太子町の地名「中大道」、奈良県当麻町竹内の小学「大道」、大和高田市の旧町名「大道町」、橿原市の小学「大道」などに残されている。

2. 竹内街道の移り変わり（歴史）

- ◆(数万年前～) 二上山のサヌカイト（石器用材）を求めて、人々が訪れる。
- ◆古墳時代 古墳の石棺用材として、二上山ろくの凝灰岩が各地に運ばれる。
- ◆613年 難波から飛鳥の都に通じる「大道」が作られる。

大道は中国や朝鮮半島からの使節・渡来人らによってすぐれた大陸文化が伝えられるとともに、わが国からは遣隋使・遣唐使・留学生も大陸におもむく街道として盛んに利用され、外交の道・文化移入の道として栄えた。また、単に大陸に通じるだけでなく、はるか西アジア・ヨーロッパにまでおよび、大道はシルクロードの終着点にふさわしく異国情緒にあふれていた。今なお、太子町には推古天皇陵・聖徳太子の墓・遣隋使小野妹子の墓・新羅への使者采女竹良の墓などがあり、さらに大陸風の石窟寺院鹿谷寺や石屋などの遺跡が当時の面影をしのばせている。
- ◆622年 聖徳太子を磯長陵に葬る。叡福寺が建立される。（寺伝）
- ◆649年 蘇我倉山田石川麻呂が謀反の疑いを受け、難波から竹内を越え大和に入り自害。
- ◆653年 大道が修治される。
- ◆710年 平城京（奈良）遷都。

難波への道は、大道より北側の竜田越・生駒越、さらに木津・淀川のルートが盛んに利用されるようになり、大道は次第に外交の道としての意味を失って、衰えていった。しかし、聖徳太子墓・叡福寺が霊場となり、太子信仰の道に変わっていった。
- ◆1493年 「明応二年・御陣図」に竹内街道にあたる道が描かれている。
- ◆16世紀中頃 堺が外国貿易で栄え、自治都市として確立されてくると、堺市と大和を結ぶ経済の道として大道は再び表舞台に姿を現した。堺の大小路から紀州街道と分岐して丹比付近の大道とつながったのも、この頃と考えられ、今日の竹内街道の原形ができたと思われる。
- ◆1688年 松尾芭蕉が当麻寺・竹内の里（当麻町）から岩屋峠を越え、竹内街道を歩いて太子（叡福寺？）を訪れる。（竹内には1809年建立の句碑がある）

◆1739年 太子町大道の地藏形道標（竹内街道で現存最古の年号入り）が作られる。

◆18世紀後半 宗教街道として賑わう。

江戸時代になって世の中が安定すると、竹内街道は大坂・堺方面からのお伊勢参りをはじめ、山上（大峯山）参り、西国三十三所巡礼の人々で賑わった。

街道沿いには道標（現在46基残っている）・常夜灯（伊勢灯籠など）・記念碑などかつての賑わいを示す石造物が多数残っている。とくに道標は宗教と深くかかわって建てられたものが多く見られる。

◆1853年 吉田松陰が春日（太子町）から竹内峠を越え、大和に向かう。

◆1863年 天誅組の中山忠光ら7人が大和から竹内峠を越え、大坂に逃れる。

◆1877年 竹内峠の改削工事がはじまる（～1882）

堺県が奈良県を併合（1876年）すると、大阪・堺～奈良の街道としての重要性をまし、大改修がおこなわれる。この記念碑は峠の旧道に残っている。この頃に、おそらく「竹内街道」の名が定着したといわれている。

また、この頃に大阪・堺の商人たちが奈良へ新鮮な魚や海産物を運び、反対に奈良の商人たちが吉野杉や山の産物を大阪・堺に運んでいた。さらに、竹内峠は河内・大和の人々の物々交換の場であった。

峠道の険しさについては、河内の山田の里（太子町）で牛を飼い、旅商人の地車を引く商売が繁盛したといわれているほどである。（この商売は1921年頃まで続く）

◆1892年 河内～大和間に鉄道（現JR関西線）が開通する。このために街道の交通量が激減したのか、まもなく峠の旅籠がなくなる。

◆1920年 竹内街道が府道・県道となる。

◆1929年 古市～橿原間に鉄道（現近鉄南大阪線）が開通する。

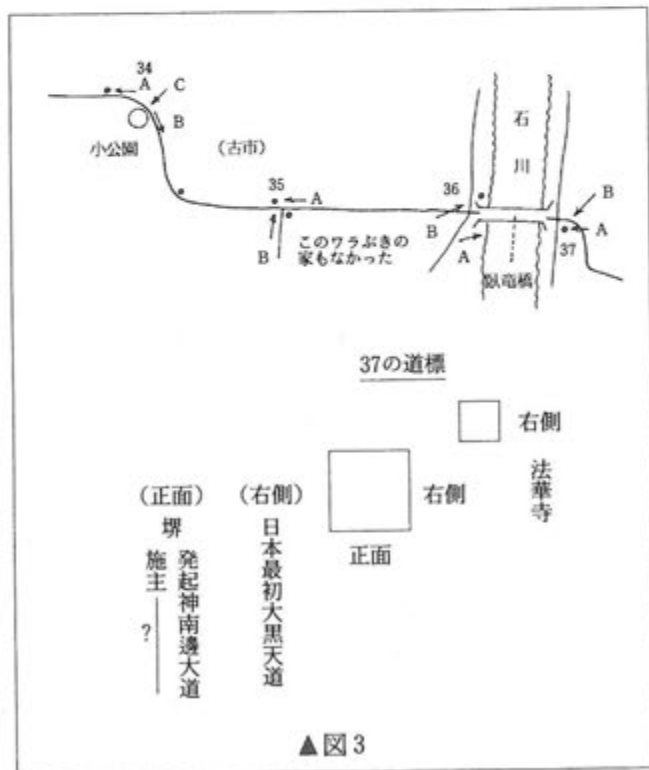
◆1930年 この頃、峠の茶屋がなくなる。（石垣と井戸跡が残っている）

◆1975年 国道166号線となる。（国道170号線と古市で分岐し大和高田市まで）

◆1985年 竹内街道が改修・舗装される。

3. 実地調査

- ① 1994年8月2日、祖父・父・母・私が自転車で調査。
- ② 起点は「竹内街道の記録のアルバム」（1970年8月20日作製）にならって、堺市榎元町の道標（西高野街道との分岐点）とした。
- ③ 自宅を5時40分に出発し、「アルバム」を片手に道標・建物・道筋の移り変わりを写真にとったり（できるだけ昔と同じように写す）、メモをしたりしながら、竹内峠まで約22kmの街道をたどった。峠にちょうど12時に着いたが、猛暑の日でみんなすっかりばててしまった。（祖父は約8km地点でリタイヤする）帰りはひたすら走って、15時に帰宅したが、行きよりもしんどく感じた。
- ④ 実地調査の結果をまとめるにあたって、記録と写真（新しく写した107枚、母たちが24年前に写した64枚）を「竹内街道の記録のアルバム」（1970年8月20日作製）と同じように、一冊のアルバムにまとめたかったが、それぞれ別のノート（B5判）に作製した。
- ⑤ 記録ノートの一部は次のようである。（図2・図3）



〈凡例〉
 6:00 時刻
 起点 0.5 次地点までの距離 (km)
 時刻・距離の測定地点
 ● 被写体
 1 アルバムの写真番号
 写した方向
 カメラ位置

〈注〉
 図2の被写体2は、「写真8」の新しい道標。
 図3の小公園(C)は、「写真17」
 「なくなっているワラぶきの家」は、「写真10」である。

⑥ 実地調査中に初めて知った事柄で、興味をもった2~3のことをまとめてみた。

・野中寺
 野中寺は、聖徳太子を葬ったと伝えられる叡福寺〔太子町〕を“上の太子”、勝軍寺〔八尾市〕を“下の太子”というのに対して、“中の太子”とも呼ばれている。
 もとは百済系渡来氏族の王氏一族の一派・船連(ふねのむらじ)が氏寺として丹比の野中郷に創建したもの。境内に、朝鮮半島から渡来しためずらしい石人像が残っていて、朝鮮文化の日本伝播の姿を探る鍵となっている。

・河内木綿
 大和川つけかえ(1704年)後、旧川筋の畑に綿作がはじまった。
 天保年間(1830~44年)には、河内の水町2万町歩のうち8,000町歩が綿作であった。和泉でも平野部で綿作が盛んになった。
 これらは、実綿が繰綿として、一部は大阪の間屋や商人に売られ、他は農家によって木綿に織られた。和泉の木綿は堺の間屋があついていた。
 1869年(明治2年)鹿兒島藩が堺紡績所を作ったが、河内・和泉の国産綿を原料としたため、良い綿布ができなかった。
 1872年(明治5年)に政府が買い上げ、後に民間に払い下げた。その後、泉州で紡績業が発達した。

・飛鳥(あすか)
 飛鳥には、大和の「遠つ飛鳥」と、河内の「近つ飛鳥」がある。
 河内飛鳥の中心は駒ヶ谷・上の太子であるが、藤井寺市、羽曳野市を含み、朝鮮半島からの渡来人達の古代文化遺跡が多く、日本古代史の宝倉である。
 「あすか」とは、朝鮮語アンスク、アスク(安宿)または、スカ(村)に由来するとの説があり、渡来人たちの安らかな宿(村)、ふるさとであったといわれている。

IV 結論

- ① 堺市榎元町の西高野街道分岐点から古市付近までは、旧街道としての面影が至る所に残っている。これは、堺から古市まで府道31号線(中央環状線を含む)が幹線道路として竹内街道にほぼ平行に作られ、ほとんどの自動車がこれを利用するので、竹内街道は脇道となってしまったからだと思う。とくに、黒土・金岡・野遠・軽里・古市などの道筋には古い道標が残り、おもむきのある古い家も残っている。
 たとえば、金岡町の家(写真1, 2)、古市糞の辻の道標(写真3, 4)、上の太子付近の道筋(写真5, 6)などは、過去20数年間に、ほとんど変わっていない。
- ② しかし、いくつかの道標はなくなっていたり、位置が変わったりしている。また、古い家もなくなったり、改築されている。
 道標……榎元町の道標(写真7)はなくなり、新しく建てられている(写真8)。
 松原市岡の道標(中高野街道との交差点)は位置が変わっている。
 家……金岡町(写真9)、古市(写真10)などはなくなっている。
- ③ 古市からは国道166号線となっているが、町中は旧道のままで昔の面影が残っている。上の太子辺りからは道はばがせまくなり、国道らしくなっているが、車の量は少なかった。太子町山田付近から旧道と分かれて広い国道となり、車の量は急に多くなっ

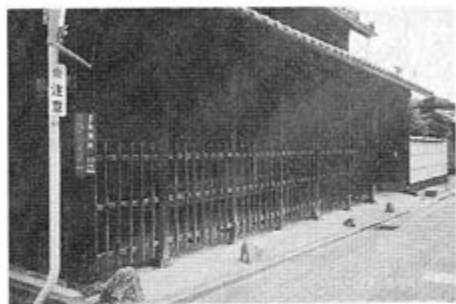
た。24年前、母たちがおとずれた時はこの辺りから峠まで、急な山道であったらしい。写真11、12は雌岳がま近に見える地点での旧新道路の様子、写真15は昔の山道、写真13、14は堺臨海工業地帯の煙突が見える地点での旧新の比較である。

④ 失われていったものもあるが、平成になってから自治体を中心となって、新しく道標を建て、一部の道を石畳にし、小公園を作ったりして、歴史の道として保存に力をいれている様子が見られる。

たとえば、榎元町の新道標（写真8）、金岡町の道標（写真16）、古市の小公園と道標（写真17）、上の太子駅の道標（写真18）などである。



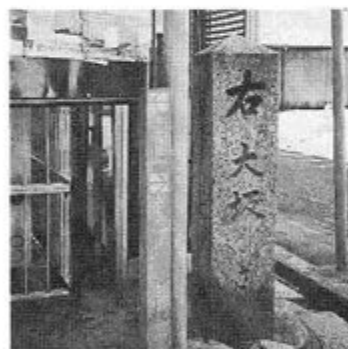
▲写真1 昔の家（金岡町）



▲写真2 今の家（金岡町）



▲写真3 昔の道標（古市）



▲写真4 今の道標（古市）



▲写真5 昔の道筋（上の太子）



▲写真6 今の道筋（上の太子）



▲写真7 なくなった道標（榎元町）



▲写真8 新しい道標（榎元町）



▲写真9 なくなった家（金岡町）



▲写真10 なくなった家（古市）



▲写真11 旧道（雌岳を望む）



▲写真12 新国道（雌岳を望む）



▲写真13 旧道（臨海工業地帯を望む）



▲写真14 新国道（臨海工業地帯を望む）



▲写真15 昔の山道



▲写真16 新しい道標 (榎元町)



▲写真17 小公園と新しい道標 (古市)



▲写真18 新しい道標 (上の太子駅)

V まとめ

新しい時代の流れにより次々と古いものが失われていくのは、ある程度仕方がないことと思うが、古いもののうち文化遺産として後世に伝えていきたいものや、是非伝えなければならないものがあるはずである。世界の遺産として、最近法隆寺や姫路城などが指定されたが、庶民の生活の歴史を語るものもそれにおとらない大切な遺産だと思う。開発と保存という困難な問題は住民と行政・企業の協力によって解決し、“心のふるさと”ともいべき美しい古いものを残してほしい。竹内街道も、その1つである。

実地調査はとてもきびしかったが、外交の道・文化伝播の道から庶民の信仰の道、さらに経済の道と移り変わった街道の姿を、ほんの一時であったが、自分の足で訪ね、自分の眼で確かめて、歴史の重みを味わった気がした。できることなら、私の子供が中学1年生になった時、どんな姿になっているか、もう一度訪ねてみたいと思う。最後に、祖父が24年前の母の「アルバム」と写真のネガを大切に残していたことと、猛暑の中、峠までつき合ってくれた父母の協力に感謝している。

・参考文献

- ・竹内 理三編集 (1983年)「角川日本地名大辞典 27大阪府」角川書店 P.727
- ・司馬 遼太郎 (1971年)「街道をゆく」朝日新聞社 P.58~130
- ・千賀 四郎編集 (1974年)「日本古代史の旅 6 飛鳥」小学館 P.28・36
- ・太子町立竹内街道歴史資料館 (1994年)「絵図でみる 竹内街道」
- ・「竹内街道の記録のアルバム 竹内街道をたどって」(1970年8月20日作製)